

第2回 みず展を振り返って

2025/3/5

道彩会事務所 糸塚章子

道彩会有志による第2回みず展（2/18～2/23）を終え振り返ってみました。

第1回では50名52点の出品がありましたが今回は48名55点となりました。

水彩画の魅力を広めたいとの思いから第1回では発起人6名が1日だけ会場でライブで絵を描くというパフォーマンスをしましたが、第2回では会期中、毎日会員2名が各々の創意工夫を駆使して水彩画の楽しさや面白さを見せてくれました。

紹介します。

渡辺 貴美子	すでに出来上がっている20号の作品を潰すべく用意した静物を透明水彩絵の具でぐいぐい描いて行く。立って描くので勢いがついたダイナミックな作品になっている。作品は中途らしくまた潰されるのか？
小杉 千賀子	下処理をした用紙に好きだというピエロの人形を鉛筆デッサンした後に着色、丁寧な作業でピエロの首回りのフリルに施したクロマパールという絵の具がキラキラ感を品よく演出して効果を狙う。
小堀 清純	透明水彩絵の具を使用。ランプと浮き球を置いた静物を構図の決め方や油性ペンでデッサンをする意味、色の選び方、明暗など解りやすく解説。出来上がりにパステルの効果的な使い方などを説明しながら描く。
糸塚 章子	小樽祝津のメモ的な小さなスケッチから10号の大きさに描き起こす事と描き慣れた札幌の街並み風景を記憶を元に画面に写すという事をやる。
林田 理栄子	小品の作品20点をタワシで洗い流し乾かした上に持ち寄った沢山の人形を描いたり下地を生かした風景だったり兎に角、自由にパワフル、スピーディーで描くことは楽しいの一言。
鈴木いずみ	30号の太筆1本で小品の花や繊細な人形の目鼻をサラッと描くのには驚きパレットも筆で掃除するように使い常にきれい、次の瞬間には取り囲むギャラリーの群像をスケッチして会場は和気あいあいとなった。
辺見 富美子	普段は描かないという生花を10号で2点、遅筆な自身に科した実験のように2時間で描くと宣言。チューブからいきなりの絵の具をパレットナイフで描く事にはギャラリーからは驚きの声。
宮武 輝久	数種の水彩紙にマスキング液を垂らしたりして紙の違いをみる。たっぷりの水でモチーフからイメージを膨らませ絵の具を次々と置いて行くという描き方で紙上で混じり合う不思議さから意図しない風景が現れる。用意したハガキ大のマット額で気に入ったカ所を切り取り作品にするトリミング方法をみせる。
佐藤 展子	片手に収まる小さな人形の可愛らしさを追求する。水彩とクレヨンで下書き無しで描き出す。パレットは原色で区割りされており混色はせず画面で色のハーモニーを生み出している。
中島 恭代	100円ショップで調達したボードやテーブルクロス裏をカットして下塗りした物に旅先で拾い集めた貝殻やビー玉からイメージを膨らませて描く抽象画。かと思えば鮮やかな花を描いた具象作品に○シールを貼る自由さ。絵の具、パステル、シール他100円ショップは画材の宝庫と笑う。
工藤 路子	会場にあらかじめ用意してあった花や花瓶、本などを次々と置き替え4点のモチーフを作るところを見せる。本人は赤い花瓶とイチゴを配した構図を選び、水彩絵の具とパステルで描いては拭き取り指で擦っては追求、深める描き方をするので幻想的な作品になる。